

共生に 思いめぐらす 道後かな

奥田隆史

突然、多文化共生研究所設立に際して、プロフィールなどの原稿を書いてくれと稲村先生から依頼が届きました。予測していなかったので少し戸惑いましたが、自分の持っている情報や考えを相手に伝えなければ信頼関係を築くことはできないので、引き受けることにしました。時間がないので、この原稿は、情報処理学会の研究会が開催されている松山市道後温泉の宿で、書いています。道後温泉といえば正岡子規と夏目漱石であり、温泉につかると良いエッセイになるのではないかと期待しながらです。

さて、夏目漱石の高弟といえば寺田寅彦です。寺田寅彦は、幾つかの作品の中で、理系と文系が離れすぎであると憂いていました。例えば、『科学と文芸』という随筆では“科学者と芸術家が別々の世界に働いて、互いに無頓着であろうが、あるいは互いに相反目したとしたところが、それは別にたいした事でもないかもしれない。科学と芸術それぞれの発展に積極的な障害はあるまい。しかしこの二つの世界を離れた第三者の立場から見れば、この二つの階級は存外に近い肉親の間がらであるように思われて来るのである。”と書いている。理系と文系が距離を置いて暮らすのも共生する方法かもしれません。しかし、両系間交流が少しあると、英国の経済誌 Economist (2008年2月21日号)から JAPAIN (痛い日

本) と揶揄されることもなくなるのではないだろうかと考えたりします。

今回は、松山までは飛行機で移動しました。機内では、じっくりと朝日、読売、日本経済新聞の朝刊を読むことができました。私の独断と偏見で、情報科学に関連する記事で、これは共生の問題として解釈できるのではないかというものを、各紙から紹介しようと思います。

[1]について：本学の教職員も悩まされている迷惑メールの問題で、早急に対策が必要であると提言しています。私も対策を急ぐことには同意します。奥田研究室では、迷惑メールについては一昨年から研究を開始したので、研究成果の一部を紹介しましょう。文献[5]では、迷惑メールが増加することにより、インターネットを利用すること自体がリスクとなっていることを示しました。文献[6]では、迷惑メールやスパムがゼロになることはあり得ないと仮定し、ならば少しの時間、パソコンでスパムを飼育し、こちらのペースで付き合う方法を示しました。2007年3月の計測結果では、12時間に一度、フォルダをチェックすればスパムをいなせるという結果を得ました。飼育の理由は、スパムかどうかの判定を自動的に行うためには、スパムがある程度必要なので、一時的にスパムが共生するというわけです。

[2]について：インターネットの普及により、商品の機能や評判をインターネットでチェックしてから商品を購入するという消費者が増えてきています。その購入パターンに付け入る悪徳ビジネスが横行しているとの記事です。具体的には、商品の評判の嘘の情報を流して、あたかも良い商品のかのように宣伝し、それをチェックした消費者が購入するという問題が起きているという記事です。これまた、悪徳な人がいる社会で、いかに生産者と消費者とがお互いにメリットがあるように共生するかという問題提起だと解釈することができます。

[3]について：インターネットの混雑が深刻だという記事です。利用者が急増したこともあります。同時に画像データなどのデータの送受信が活発になってきたからです。これに通信料金が定額という仕組みが拍車を掛けています。定額制はあまり使わない人もたくさん使う人も料金は一緒です。あまり使わない人とたくさん使う人を

共生させるためにはどうしたらよいか。経済モデルと数理モデルを組み合わせて問題解決したいと思いました。

参考文献

- ・“社説：迷惑メール「海外発」への対策も急げ”、朝日新聞朝刊、2008年3月5日。
- ・“ネット社会：深まる闇 ロコミ親和欺くブログ”、読売新聞朝刊、2008年3月5日。
- ・“ネット混雑深刻-回線の整備ルール探る”、日本経済新聞、2008年3月5日。
- ・奥田、“Spam メールとサイレントメールを考慮した電子メール利用リスクに関する一考察”、電子情報通信学会技術と社会・倫理研究会、vol. 107、no. 66、pp. 11-16、2007。
- ・奥田他、“スパムの到着特性を利用したスパムを`いなす`方法—スパムフォルダ内メールの削除間隔—”、経営情報学会 2006年秋季全国研究発表大会、pp. 400-403、2006。

著者プロフィール

奥田隆史 (OKUDA Takashi) 情報科学部 (地域情報科学科) 教授 情報通信ネットワーク、通信トラヒック理論、プロフェッショナル・コミュニケーション学

■略歴：1985年豊橋技術科学大学情報工学課程卒業。1987年同大学大学院修士課程修了。1987年セイノー情報サービス(株)。1988年～1992年豊橋技術科学大学(情報工学系・教務職員、助手)。1993～1996年朝日大学経営学部(講師、助教授)。1997年より現職。その間、1994～1995年Weber州立大学客員助教授、2002～2003年Duke大学客員研究員。工博(豊橋技術科学大学、1992年9月)。所属学会：計測自動制御学会、電子情報通信学会、情報処理学会、IEEE、日本オペレーションズ・リサーチ学会、日本教育工学学会、経営情報学会会員。



趣味：大リーグ観戦（'80年代からのマニア。写真は米国野球殿堂博物館、National Baseball Hall of Fame and Museum、Cooperstown、NY）、野外生活（芋煮会、八ヶ岳散策）、自転車（ロード、MTB）、ヨガやピラテスなど。

■**これまでの研究**：我々は高度情報化社会に生きています。高度情報化社会では、多彩なサービスを実現するため、身の周りのあらゆるモノがいつでもどこでもネットワークに繋がります。そうすると、ネットワーク上を流れる情報量も激増し、情報の発生パターンも複雑になります。そこで、私の研究室（情報通信システム研究室、通称奥田総研）では、(1) 複雑な発生パターンに対応可能な情報ネットワークを設計する

ための性能評価に関する研究、(2) 車や人型ロボット（右写真は私の研究室のロボットの従兄弟）や自転車が繋がっているような新しいタイプのネットワークシステムやそれらを利用した新しいサービスを構築する研究をしています。基礎理論は情報通信ネットワーク、オペレーションズ・リサーチ、サービス・サイエンス、待ち行列理論、確率モデルになります。



■**これからの研究**：これまでの研究を深化もさせますが次のようなことを考えています。我々の周辺には多数の「お化け」がいます。例えば、情報化、少子化高齢化、価値観多様化、大学大衆化などです。これらの「お化け」が原因となった社会問題（社会経済、経営、都市・地域、多文化共生、国際関係等の諸問題）を、数理的なアプローチによって解明し、ICT（情報通信技術）の遍在や利用を前提とした問題解決方法を提案していきたいと考えています。提案には、LOHASに代表されるような、ICTを適切に利用した新しい生活スタイルなども提唱・実践していきたい。正岡子規は、文学を通じて野球の普及に貢献したという理由で、2002年に野球選手とともに日本野球殿堂入りを果たしました。私は、人型ロボット技術を利用して野球の発展に貢献したという理由で、米国野球殿堂博物館へと入りたいとも考えています。

■**「共生」について**：広義には、上記の(1)は多様な情報の共生、同(2)は人と技術との共生です。ベネッセ表現読解国語辞典には、共生とは、社会学の視点では「個性を認め合い、共に助け合って生きること」、地球環境学の視点では「自然と人間が、地球上で調和してともに生きていくこと」、生物学の視点では「異種の生物がともに生きていること」とある。現代人には共生リテラシーが必要になってきているのだろう。相手と相手の文化を尊敬／容認する他者理解能力、自分と自分の文化を正しく伝えるコミュニケーション能力などがリテラシーに含まれるのであろう。“偏見・習慣・他者からの影響を振り払うために、新しいものの見かたを見つけるための努力を怠ってはならない (N. H. Kleinbaum).” を思い出します。